

江古田小校長室便り 「温故創新」

H30(2018)・0116 NO75

校長 伊波喜一

我が生の 全てを賭けて キャンバスに 向かう執念 命燃え尽く

東山魁夷(ひがしやま かい)展が開催されている。氏の作品の中で、筆者は「草青む」など白馬の絵の印象が強く残っていた。が、今回80点にもものぼる作品を観て、強く印象に残る作品があった。「夕星」がそれで、魁夷91歳の作品である。湖畔に浮かぶ風景の中に夕星が一際、強い光を放っている。魁夷は病床でこの絵を描きあげ、一度、篆刻(てんこく)を押した。しかし、その絵に満足できず、篆刻を塗りつぶして再度描こうとしたが、絶筆になったと言われる。誰もが認める巨匠でありながら、最後の最後まで作品にこだわり続けた姿に、心を揺すぶられた。魁夷は、決して恵まれた環境で絵を学んだわけではない。太平洋戦争末期の激流に翻弄され、相次いで肉親を失いながらも、絵筆をとり続けた。鑑真を祭った唐招提寺の襖絵を描く際には、鑑真和尚の故郷である中国の桂林に足を運び、丹念に写生を続けた。「桂林月夜」はその執念が凝縮されたかのようだ。限りある生を燃焼して生き抜いた魁夷の作品に魅了されるのは、その刹那の永遠性にあるのかも知れない。